

COFFEE CITY FESTIVAL

札幌コーヒ一年表

①1970-1990 年代

1960
ポールスター

1960
桃山

1966
ELEVEN

1971
可否茶館 大通店

● 現在も営業中！

1974
蔵人

● 現在も営業中！

1974
ミルク

● 現在も営業中！

1975
北地蔵

1976
倫敦館

● 現在も営業中！

1977
カフェ・ランバン

● 現在も営業中！

~1970

喫茶店文化の広がり

喫茶店は高校生が 入れない場所だった？！

喫茶店も映画館もボーリング場も実は高校生の利用が禁止だった

喫茶店で結構タバコが吸われていたこともあってね。今の高校生は信じられないかもしれないけど、18歳以下は入れない場所のひとつでした。映画館もジャンルを問わず自分たちだけでは入ることができず、親の同伴が必要だったくらい。喫茶店でタバコを吸ったのを見つけて停学になった同級生も居たね。高校生だった私たちにとっては背伸びしてでも行ってみたい憧れの場所だったのよ。



ビジネス喫茶『ポールスター』の店内の様子

ビジネスマンが集う喫茶店 『ポールスター』流のコーヒーサーブ

オフィス街にある喫茶店はビジネスマンが会議をするのによく使われていた。「ポールスター」という当時の有名な喫茶店が、大人数の会議用のコーヒーを、一度にたくさん淹れて運んでいるシーンもよく見ましたね。

幻の喫茶店『ELEVEN』のアメリカン

ELEVEN のコーヒーはとっても美味しいんだけど、すごく濃くて苦いのね。ただ“アメリカン”というシステムがあって、濃いコーヒーをお湯で割って提供してくれたの。それが当時の私にとっては画期的で、最初に美味しいって感動したコーヒーだったかな。

亜璃西社 代表取締役
和田 由美 さん

“やたら苦くて” “どろっとした” コーヒー

まだあんまり美味しいコーヒーの淹れ方とか、わかっていなかったんじゃない？
やたら苦くてなんだかどろってしていて、そのままではとても飲むのは難しかった。だからお砂糖は2杯入れるし、付いてくるミルクもキッチリ全部使ったの。経営者泣かせよね。

1杯のコーヒーを片手に喫茶店で 語り合うのがデートコースの定番

当時はいろんなことができるほどお金があったわけじゃないけれど、デートとなるとやっぱりカッコつけたいから、ちょっと大人びて喫茶店でコーヒーを頼むーそんな場所だったわね。だから、高価だったレモンスカッシュは一度も飲めなかったなあ。

半分仕事、半分楽しみで行くような 華やかな喫茶店『桃山』

ちょうど PARCO の裏側あたりにあった桃山はクラブみたいにきらびやかで、そのうえウェイトレスは美人でスタイル抜群のお姉さんばかり。しかも横に来て膝をついてコーヒーを出してくれるような喫茶店だったのよ。会社のお偉いさんが打ち合わせをしたりするのに使っていたような場所でした。



札幌に2軒もあった『高級喫茶』

当時の
コーヒ
って
どん
んな
もの
だっ
た？

1982
斎藤珈琲

1982
サッポロ珈琲館 本店
●現在も営業中！

1987
HALLSTAIRS CAFE パレード店

1988
ロックフォールカフェ
●現在も営業中！

1993
円山坂下 宮越屋珈琲本店
●現在も営業中！

1980 『カフェ & バー』ブームの到来

音楽と喫茶店の密接な関係

中島みゆきさんの歌の舞台になった
喫茶店『ミルク』

1970年代は喫茶店が音楽文化の中心になっていて、狸小路や北24条のあたりに「音楽喫茶」がたくさんあったの。喫茶店「ミルク」のオーナーも元はシンガーソングライターで、コンサートを主催したりしていくうちに音楽好きの集まる聖地になっていったのよね。

COFFEESHOP

音楽に触れる場所

大学生だった頃はとにかくお金がなくて、当時100円前後だったコーヒー1杯を頼むのがやっとだったの。レコードなんてとても高くて買えない時代だったから、必死になってジャズやブルースのかかっている喫茶に行ったらはひたすら音楽を聴いたりしていました。



音楽喫茶『ミルク』の店内の様子



当時のショップカード的存在『マッチ箱』

喫茶店の個性が表れた
多種多様なデザイン

携帯電話がなかった当時、住所と電話番号が書かれたマッチ箱は喫茶店の顔で、とても大切なものだったのよ。お店によって様々なデザインがあって、デザインのできるお客さんがコーヒー代としてマッチ箱をデザインしていたこともあったみたい。

CULTURE

マッチの住所で待ち合わせ
呼び出しは店の電話で

例えば喫茶店で待ち合わせの約束をしていて、お仕事が長引いて遅れちゃったとするでしょ。すると、マッチ箱に書かれた番号に電話をかけるの。そしてお店づてに待ち合わせ相手を呼び出してもらってあと何分で着くとか伝えていました。今じゃ考えられないことよね。

1990～

スペシャルティコーヒーの潮流

**1996
横井珈琲 発寒本店**

● 現在も営業中！

**1996
森彦 本店**

● 現在も営業中！

**2005
徳光珈琲 石狩本店**

● 現在も営業中！

**2006
丸美珈琲店
大通公園本店**

● 現在も営業中！

**2007
寿珈琲**

● 現在も営業中！

PC・スマートフォン
からもご確認
いただけます。▶▶▶



Q. スペシャルティコーヒーの文化が札幌に入ってきた時、どんな印象を受けましたか。

A. 深煎りのコーヒーが主流だった札幌に、「新しいジャンル」がやってきたんだな、という感覚でした。苦くて濃いイメージだったコーヒーが、紅茶のような優しい飲み物になってきたんだなって感じ。女性客が増えてきたことも影響があったのかしら。



Q. 道外や他の街と比べて、札幌特有のコーヒー文化みたいなものってあるんでしょうか。

A. 札幌は寒いからね。温かい飲み物としてコーヒーが受け入れられているのもあって、すごくコーヒーの美味しい街だと思う。あとは、北海道は本州と比べて開拓地で歴史も浅いから、いろんなカルチャーや価値観を持つ人が自由にコーヒーを淹れていて、それを受け入れてきました。だから、とても豊かなコーヒー文化が育ったんだと思うよ。



Q. 昔の喫茶店と今のコーヒー専門店の似ているところ、違うところがありますか？

A. 先人たちによって研究されてきた知見から、道具もいろんなものが出てきたし、コーヒーの味もコーヒー店のスタイルも変わってきているとは思う。でも職人タイプというか、本物を追求したいという店主や焙煎士たちの姿勢は、どの時代を通して共通しているんじゃないかな。



亜璃西社
和田 さん



亜璃西社
井上 さん



亜璃西社
和田 さん

COFFEE LOVER

ご協力いただいたコーヒーバー



和田由美
わだ・ゆみ

1949年小樽生まれ。札幌南高、藤女子短大卒。札幌初のタウン誌編集長を経て、88年に出版と編集の亜璃西社を設立。エッセイストとしても活躍中。著書は『さっぽろ喫茶店グラフィティ』など多数。監修した『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ』が好評発売中。



喫茶店グラフィティ



地酒ラベルグラフィティ



吉田 拓洋
よしだ・たくみ

札幌市出身。大学の馬術部在籍時の最愛の相棒であったマチカネシラミ死去に伴い、「さっぽろの珈琲屋さん。」と題して「札幌の珈琲たちと珈琲店の人々が紡ぐ変遷の歴史を正史に近い形で未来へ届ける」為にYuki Kurosawa氏と共に活動中。



さっぽろの珈琲屋さん。
札幌の自家焙煎珈琲店を中心とした変遷の歴史を、長年に渡り実際に足を運んで紡いだ一冊。電子書籍版6月3日、紙冊子版は7月19日発表予定。



彦坂 開 ひこさか・かい
北海道大学珈琲研究会 代表
スペシャルティコーヒーの存在を大学生に広めたい！いつでもメンバー募集中です！



和田侑士 わだ・ゆうと
北海道科学大学珈琲同好会 部長
100周年ブレンド開発、大学祭出店など楽しいことやってる同好会です！



深澤 未来 ふかざわ・みく
全国のコーヒーをセレクトするお店「THE RELAY」チーフ
普段はコーヒー屋・ライター、そしてコーヒーシティフェスティバルの運営やってます！

参考文献・喫茶店写真提供：
『さっぽろ喫茶店グラフィティ』（亜璃西社）
制作：COFFEE CITY FESTIVAL 実行委員会
みなさまご協力本当にありがとうございました！

